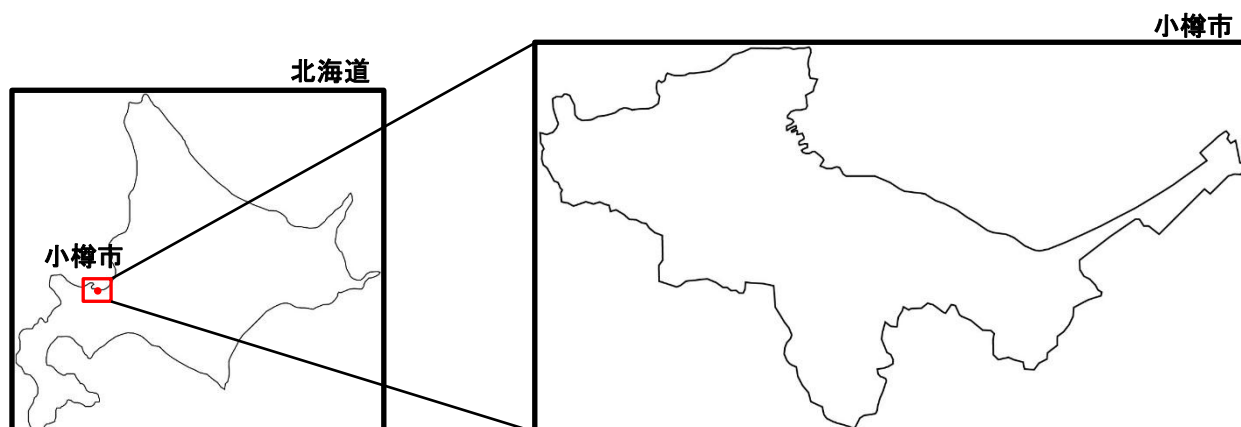


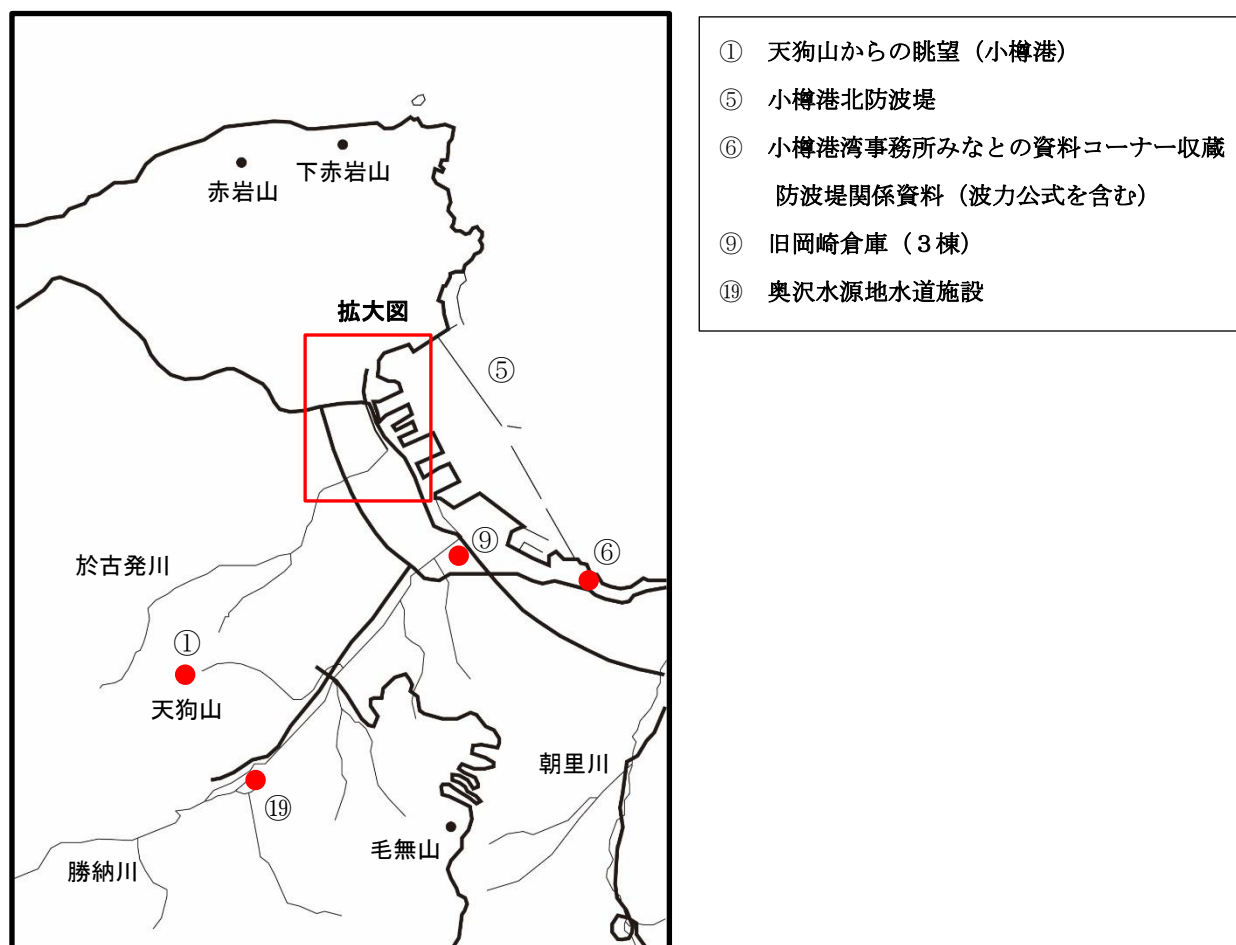
① 申請者	小樽市	② タイプ	地域型 / シリアル型 Ⓐ B C D E Ⓕ
③ タイトル			
北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽 ～「民の力」で創られ蘇った北の商都～			
④ ストーリーの概要（２００字程度）			
明治以降に、港と鉄道の大動脈により急速に発展していく小樽は、未来を夢見た人々の「民の力」によって北日本随一の商都となった。“北海道の『心臓』”と小説家・小林多喜二が表現したまちには、多くの歴史的遺産が生まれた。 やがて高度経済成長期に衰退した小樽は、荒廃した運河の埋立計画を契機に、忘れられていた遺産を「民の力」により保存、再生する道を選んでいく。 重厚な銀行建築、にぎわう運河とともに、路地のあちらこちらに、近代日本の姿を守り、活かす小樽市民の物語をみることができる。			
⑤ 主な構成文化財			
小樽運河（未指定・史跡） 小樽運河を守る会関係資料（未指定有形文化財・歴史資料） 色内銀行街（一部市指定有形文化財群・建造物） 旧手宮鉄道施設（国指定重要文化財・建造物） 旧日本郵船株式会社小樽支店及び附属倉庫群（国指定重要文化財・建造物） 旧三井銀行小樽支店（国指定重要文化財・建造物）			

市町村の位置図（地図等）



構成文化財の位置図（地図等）

全体図



拡大図



ストーリー

かつて小説家・小林多喜二が「北海道の『心臓』みたいな都会である」と表し、日本の近代化を支えた「北日本随一の都市」であった小樽。現在は、全国有数の観光都市となっていますが、高度経済成長期の中で「斜陽のまち」と呼ばれ、沈みかけた時期がありました。その時、歴史的な遺産を守り、さらに活用しながらまちの再生を模索した小樽市民がいました。小樽では明治から、まちの発展とともに未来の成功を夢見て小樽にきた漁夫、商人、船乗りなど多種多様な人々、さらに財を成した資本家たちによる「民の力」で自らまちをつくり上げてきた歴史がありました。小樽の黎明期から脈々と流れてきた「民の力」によって、元気を失った「北海道の心臓」は新たな鼓動を始めます。これはまちの衰退を「民の力」によって、遺産の保存と活用をまちづくりに生かし続ける人たちの物語です。

【港と鉄道の「大動脈」によるゴールドラッシュ】

小樽の近代化は鉄道と港からはじまります。明治以降、政府は北海道の資源が日本の近代化に必要不可欠とし、本格的な開発が始まりました。その拠点が小樽でした。江戸時代末期よりニシン漁場として知られていましたが、明治2年に商船の航行が自由になると北前船の往来が盛んになりました。「北海道の心臓」となる契機は、北海道の内陸部で産出する石炭輸送のため北海道初の鉄道が建設されたことです。小樽から輸送された石炭は本州および海外で近代産業の勃興に貢献しました。明治中期以降、北海道への移民が本格化すると、増大する道内の人口を支える生活物資の供給基地として小樽は大きく発展していきます。物流拠点となった小樽には、卸商や金融機関が軒を並べ、海岸線には移出入の物資を保管する石造倉庫が並び、仕事を求める人々が殺到する、ゴールドラッシュさながらの活況が出現しました。この時期、全国で近代化の波は広がっていきますが、小樽はその急速な発展により特筆すべき都市に成長し「神戸、横浜に次ぐ商港」（三井銀行支店長会議録）、「時代のどんな波も素通りすることがない」（小林多喜二）などと、日本の近代化が凝縮したような都市となりました。



旧手宮鉄道施設（国指定重要文化財）

【経済の「血液」金融が生んだ北日本随一の都市】

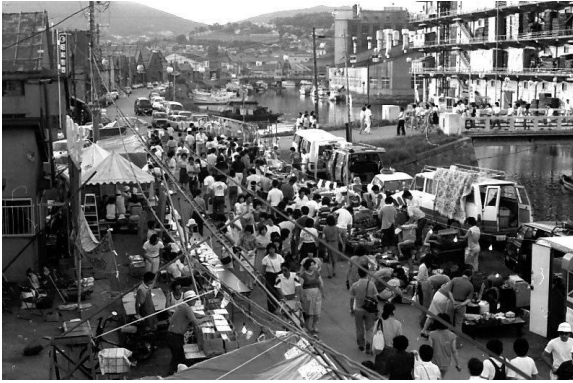
鉄道と港の整備により、豊富な北海道の資源の物流拠点となった小樽は、明治末期に日露戦争の終結により南樺太への窓口となり、多くの商社、金融機関が進出し、最盛期には25の銀行が活躍した金融のまちとなりました。その時期、日本郵船小樽支店が工部大学校（現東京大学工学部）一期生の佐立七次郎の設計で完成し、同じく一期生の辰野金吾らによって明治45年に日本銀行小樽支店が完成。昭和2年には、三井銀行小樽支店も



色内銀行街

同期生曾禰達蔵が中條精一郎との設計で完成しているほか、その時代の日本を代表する建築家が手掛けた建築物が数多くのこされています。「色内銀行街」には、日本の近代建築を象徴する遺産が今ものこり、文化施設などに活用されています。さながら「近代建築の博物館」であり、往時の小樽を反映する象徴です。

【「斜陽のまち」から観光都市へ・「民の力」による再生】



ポートフェスティバル・イン・オタル

壊し、運河を埋め立て道路にする計画が決定し、^{ありほろ}有幌地区の倉庫群の取り壊しが始まりました。

そのとき「まちの記憶」をまもうと保存運動が起こります。10年にもわたる小樽運河を守る会と市民による「小樽運河保存運動」の始まりです。運動は、当初、すでに工事が開始され、市民が近づかない運河をまもる意義が問われ、四面楚歌の状態でありました。しかし、運動が訴え続けた「**地域に生きるとは何か**」というメッセージに若者たちが応え、運河とその周辺の石造倉庫を舞台にした市民手づくりのイベント「ポートフェスティバル・イン・オタル」を開催し、6万人もの市民らが運河を訪れました。若者たちは署名活動にも奔走し、2か月で9万7千人の署名を集め、運河保存の気運を高めました。運動が受け入れられた背景には、港湾都市、商都としてまちをつくってきた市井の人々の誇りと「民の力」の伝統がありました。歴史を生かす新たな展望と具体的な代替道路案を提案した運動は、その後のわが国のまちづくり運動の先駆けとなりました。運動は運河を全面保存できませんでしたが、一部は散策路として整備され、市民が再びまちに誇りがもてる観光都市として再生しました。その動きは今も脈々と引き継がれ、市民と行政、経済界が一体となる

「小樽雪あかりの路」は今やわが国を代表するイベントに成長し、多くの外国人ボランティアに支えられています。「民の力」は世界に広がりを見せているのです。

【歴史を活かすまち・小樽の新たな鼓動】

全国から新天地を求めて人々が押し寄せた小樽では、私費による治療院や孤児院の運営などの福祉、厚生、障がい児教育へのとりくみなどの社会基盤を作ってきた「民の力」の歴史をもちます。「小樽運河保存運動」によって、まちの遺産が再評価され、まちづくりに活用している背景にはこの「民の力」の伝統が生み出したものです。運河をまちのシンボルとして蘇らせ、まちづくりに生かし、これら遺産の魅力を伝える新しい活用の模索は、今もまちの至る場所で始まっています。

小樽は終戦後、高度経済成長期の衰退においても「民の力」で再生したまちです。小樽に生きる人々が、遺産に新たな命を吹き込み、もう一度「心臓」の鼓動を動かす今の物語を感じることができるのです。

小樽港は終戦後も復興の拠点となっていました。エネルギーが石炭から石油に変わる中で昭和40年代には取扱貨物が大きく減少しました。入港船舶の減少に加え埠頭が荷役の中心に移ったことにより、^{はしけ}舢舨荷役の役割を終えた運河は荒廃が進み、長年にわたって堆積したヘドロからメタンガスがブクブク泡をたて、壊れた船が沈んだ状態でした。高度経済成長期に取りのこされたまちがそこにはありました。小樽では、増え続ける車社会の対応や経済再生のために倉庫を取り



冬のイベント「小樽雪あかりの路」



小樽運河と倉庫群

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	ふりがな 文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の 所在地 (※4)
①	てんぐやま 天狗山からの眺望 (小樽港)	未指定 文化的景観	小樽港を一望する景観。近代初頭の北前船交易からはじまり、石炭輸送の拠点港となった。階段状にせりあがった独特の地形と、かつての商都小樽を一望できる景観。	
②	きゅうてみやてつどうしせつ 旧手宮鉄道施設	国指定 重要文化財 有形文化財 (建造物)	明治 18 (1885) 年ほか。石炭輸送のために建設された幌内鉄道にかかわる施設群。日本の近代化を支えた北海道の石炭はここから全国に運ばれた。	
③	おたる しそうごうはくぶつかん 小樽市総合博物館 しやうてつどうしやりようぐん 所蔵鉄道車両群	未指定 有形文化財 (歴史資料)	明治 18 (1885) 年製造の「しづか」号、明治 28 (1895) 年製造、国産 2 号機「大勝」号などの蒸気機関車をはじめ、鉄道による物流を担った貴重な車両群 6 両。	
④	きゅうてみやせんさんさくろ 旧手宮線散策路	未指定 史跡	明治 13 (1880) 年に部分開業した幌内鉄道の一部。小樽が物流の拠点として成長するきっかけとしてだけではなく、日本の近代化を支え続けた路線。軌道を残したまま整備をしている。	
⑤	おたるこうきたぼうはい 小樽港北防波堤	未指定 有形文化財 (建造物)	明治 41 (1908) 年完成。日本初の外洋防波堤。廣井勇の設計、指導。小樽港の価値を決定づけた記念碑的な構造物。	
⑥	おたるこうわんじむしよ 小樽港湾事務所みな との資料コーナー しゅうぼうはていかんけいしりよう 収蔵防波堤関係資料 (波力公式を含む)	未指定 有形文化財 (歴史資料)	明治末期～昭和。北防波堤など小樽港築港関係資料。「百年試験」のモルタルブリケットなど土木技術の粋を集めた工事を物語る。	
⑦	きたはまちくそうごぐん 北浜地区倉庫群	未指定 有形文化財 (建造物) 群	明治 20 年代から 30 年代建設の 6 件の倉庫群。小樽の近代化の第一段階、商業都市の萌芽期より営業用倉庫として使用されている。	
⑧	みなみはまちくそうごぐん 南浜地区倉庫群	未指定 有形文化財 (建造物) 群	明治 20 年代から大正期建設の 3 件の倉庫群。物流の増加に伴い、旧市街地に近い埋め立て地にも倉庫が次々と造られた。	
⑨	きゅうおかぎさうこ 旧岡崎倉庫 (3棟)	未指定 有形文化財 (建造物)	明治 38 (1905) 年ほか。物流が盛んになると、倉庫群はさらに広がっていった。現在は酒蔵として公開中。	
⑩	きゅうにつぽんゆうせんかぶしがいしや 旧日本郵船株式会社 おたるしてんおよふぞく 小樽支店及び附属 倉庫群	国指定 重要文化財 有形文化財 (建造物)	明治 39 (1906) 年、工部大学校一期生の佐立七次郎が設計。周辺の倉庫群を含め、商業都市として変貌した明治後半の小樽の姿を象徴する建物。	

⑪	にほんぎんこうきゅうおたるしてん 日本銀行旧小樽支店	市指定 有形文化財 (建造物)	明治 45 (1912) 年、工部大学校一期生であり、当時の日本建築界のリーダーであった辰野金吾らが設計した。金融の面でも北日本の中心となった小樽の象徴的存在。資料館として公開中。	
⑫	きゅうみつぎんこうおたるしてん 旧三井銀行小樽支店	国指定 重要文化財 有形文化財 (建造物)	昭和 2 (1927) 年、工部大学校一期生の曾禰達蔵の建築事務所が設計。工部大学校一期生のうち 3 人の作品が存在する唯一の地方都市であることは、経済都市としての繁栄を物語るもの。	
⑬	いろないぎんこうがい 色内銀行街	未指定 (伝建)	明治末から昭和中期。10 件の建築から構成される半径 500 メートルの範囲に銀行建築が立ち並ぶ景観は、全国的にも小樽でしか見ることができない。	
⑭	いろないどお・さかいまちどお 色内通り・堺町通り の商店 しょうてん	未指定 有形文化財 (建造物) 群	明治 30 年代から大正期の商店建築 14 件。経済都市の心臓部であった色内通り、卸商が集まっていた堺町通りに残る商店建築。銀行建築とともに経済都市小樽の面影を残している。	
⑮	きゅうおたるしょうこうかいぎしよ 旧小樽商工会議所	未指定 有形文化財 (建造物)	昭和 8 (1933) 年建設。北日本随一と言われた小樽の経済機能を象徴する建物。現在はホテルとして改装中。	
⑯	おたるえきほんやおよ JR小樽駅本屋及びプ ラットホーム	国登録 有形文化財 (建造物)	三代目の駅舎として昭和 9 (1934) 年に完成。商都小樽の玄関としてふさわしく、当時鉄道省主要駅と同じデザインが採用されている。	
⑰	はんえいきりょうてい 繁栄期の料亭・ホテル けんちくぐん 建築群	未指定 有形文化財 (建造物) 群	小樽の繁栄時全道一の数を誇った小樽の料亭、海外客を中心として宿泊した洋式ホテル。経済活動の一面を表す建物。一部はリノベーションされホテルとして再開。	
⑱	おたるうんが 小樽運河	未指定 史跡	小樽のシンボルともいえる小樽運河は大正 12 (1923) 年完成。舁荷役の効率化のために沖合に作られた。小樽の黄金期を物語る史跡。	
⑲	おくさわすいげんちすいどうしせつ 奥沢水源地水道施設	未指定 有形文化財 (建造物)	大正 3 (1914) 年。商業港として船舶への水の供給、小樽の人口を支えるために中島鋭治の指導で建設された近代水道施設。経済都市のインフラとしてだけではなく、景観としても貴重。	
⑳	うんがかんせいごそうこぐん 運河完成後の倉庫群	未指定 有形文化財 (建造物) 群	大正後期の倉庫群 3 件。運河完成後に建設された木骨石造もしくは RC の倉庫群。運河とともに歴史的な景観を形成している。商業施設として公開。	
㉑	きゅうほつかいせいかんそうこかば 旧北海製罐倉庫(株) じむしょとうこうじょう 事務所棟・工場・ そうこ 倉庫	未指定 有形文化財 (建造物)	大正 11 (1922) 年～昭和 10 (1935) 年。小樽運河の埋め立て地に建設された製缶会社の工場・事務所・倉庫。舁荷役の最盛期の象徴的な建造物群。	
㉒	おたるしそうごうはくぶつかん 小樽市総合博物館 しょうざう 所蔵 9.5 ミリ動画資料 どうがしりょう	未指定 有形文化財 (歴史資料)	昭和初期に流行し、小樽の資産家たちにより撮影された動画資料。繁栄期の小樽の同時代資料として貴重。写真とともに総合博物館で公開。	

②③	なかむらぎんさくさくふうけいが 中村善策作風景画	未指定 有形文化財 (絵画)	大正から昭和、小樽の繁栄期と衰退期の風景を資産家たちの経済援助を受けて描いた。また、歴史資料としても貴重である。	
②④	おたるうんが まもるかい 小樽運河を守る会 かんけいしりよう 関係資料	未指定 有形文化財 (歴史資料)	昭和 40 年～60 年代。小樽運河の保存運動にかかわるチラシ、ポスター、各種切抜などの資料群。文化財を保存し、まちづくりを考えた、小樽の転換期を物語る資料。	
②⑤	ふじもりしげおさくふうけいが 藤森茂男作風景画	未指定 有形文化財 (絵画)	昭和 40 年代の小樽運河を描き衰退期の小樽、荒廃していた小樽運河を描いた作品群で知られる。のちに運河保存運動の象徴的な存在となる。	
②⑥	ひょうごしゃしん 兵庫写真コレクシ ョン	未指定 有形文化財 (歴史資料)	昭和 50 年代、「斜陽のまち」といわれたころの小樽の姿をおよそ 5,000 枚の写真に収めた資料。再生、変貌する以前の小樽の姿が映されている。	

構成文化財の写真一覧

① 天狗山からの眺望（小樽港）



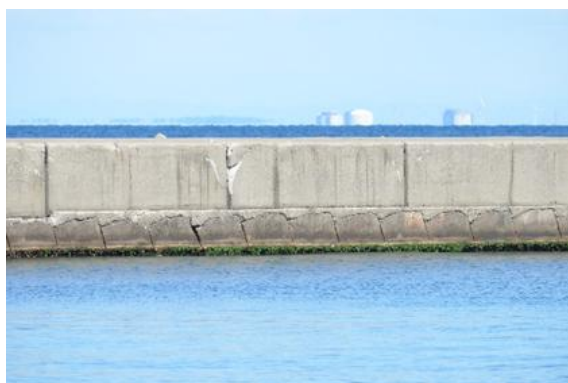
④ 旧手宮線散策路



② 旧手宮鉄道施設



⑤ 小樽港北防波堤



③ 小樽市総合博物館所蔵鉄道車両群



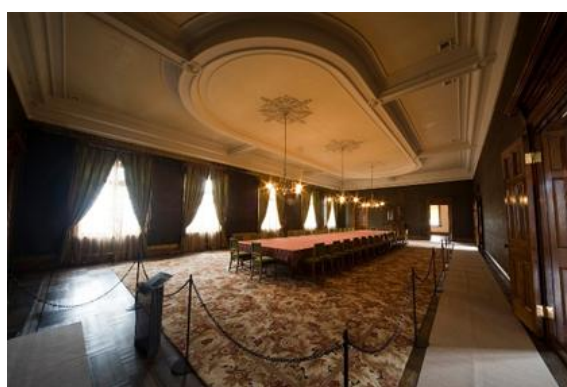
⑥ 小樽港湾事務所みなとの資料コーナー
収蔵防波堤関係資料（波力公式を含む）



⑦ 北浜地区倉庫群



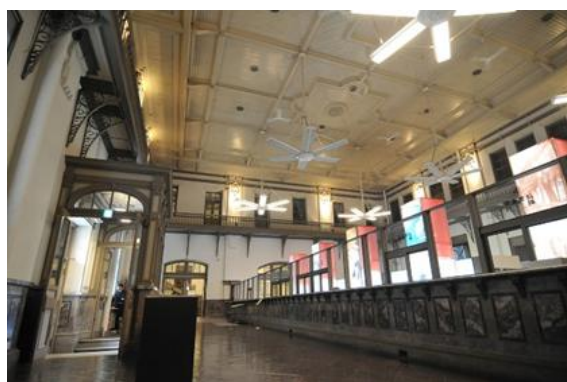
⑩ 旧日本郵船株式会社小樽支店及び附属倉庫群



⑧ 南浜地区倉庫群



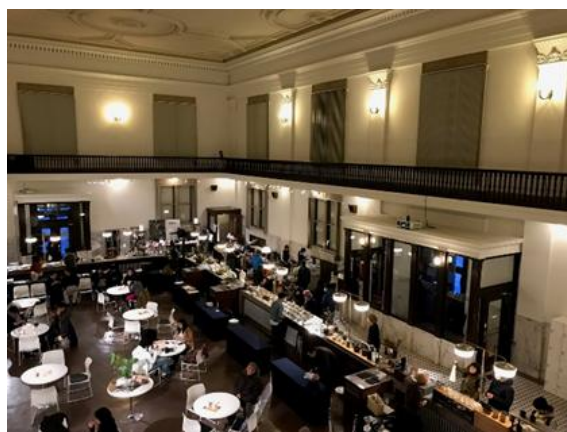
⑪ 日本銀行旧小樽支店



⑨ 旧岡崎倉庫（3棟）



⑫ 旧三井銀行小樽支店



⑬ 色内銀行街



⑯ J R 小樽駅本屋及びプラットホーム



⑭ 色内通り・堺町通りの商店



⑰ 繁栄期の料亭・ホテル建築群



⑮ 旧小樽商工会議所



⑱ 小樽運河



⑱ 奥沢水源地水道施設



⑳ 運河完成後の倉庫群



㉑ 旧北海製罐倉庫(株)事務所棟・工場・倉庫



㉒ 小樽市総合博物館所蔵 9. 5 ミリ動画資料



㉓ 中村善策作風景画



日本遺産を通じた地域活性化計画

認定番号	日本遺産のタイトル
105	北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽 ～「民の力」で創られ蘇った北の商都～

(1) 将来像 (ビジョン)

これまでの経緯

「北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽（以下「北海道の心臓」という）」は、サブテーマを「民の力で創られ蘇った北の商都」としており、「民の力」＝民間主体のまちづくりを大きな特徴としている。本市は、運河埋立てを巡る激しい論争を経て現在の観光都市となった歴史的背景から、市民のまちづくり意識が高く、これまでも官民連携して様々な取組を進めてきた。

2015 年の日本遺産の制度創設を受け、本市は歴史と文化を生かしたまちづくりを推し進めるため、認定に向けた取組を開始し、2018 年に「北前船」の追加認定、2019 年には「炭鉄港」の認定を受けた。併せて、2018 年には、「北海道の心臓」の認定に向けて小樽市日本遺産推進協議会（以下「本協議会」という）を設立。2021 年の候補認定を機に、更に地域連携を強化し一体となり取組を進めてきたところである。

本協議会では、2022 年に「人材育成」「普及啓発」「調査研究」3 つのワーキンググループを立ち上げ、各リーダーを中心に多岐にわたる取組を進めてきた。また、2021 年には（公社）似鳥文化財団が中心となって文化観光推進法に基づく拠点計画を策定して取組を開始したほか、2022 年には（一社）小樽観光協会が登録 DMO となり観光地域づくりの体制も整えた。また 2023 年には、歴史まちづくり法に基づく歴史的風致維持向上計画の策定に向けて法定協議会を立ち上げ、文化観光の推進に向け一層取組の強化を図っているところである。

さらに特筆すべきは、この街の未来を担う若い世代の台頭・活躍である。候補地域認定後、市制 100 周年（2022 年）・運河 100 周年（2023 年）と本市の節目を機に、20 代～30 代の若い世代が実行委員会を組織してまちづくりイベントを開催するなど、「新たな民の力」により地域活性化が推し進められるようになったことは、今後の本市の日本遺産活用と地域活性化にとって大きな推進力として期待が高まっている。

また、本市の長期構想においても、「第 7 次小樽市総合計画」や「小樽市第 2 次観光基本計画」をはじめとする計画に日本遺産を位置づけ、本市の観光振興にとって重要な施策として取り組んでいるところである。（※詳細は、「(5) 日本遺産の取組を行う組織の自立・自走」に記載）

目指す姿

今後も、本市の特徴である「民の力」を活かし、行政・民間など垣根を超えて地域一体となって、歴史と文化を生かしたまちづくりを進め、「観光客が多彩で奥深い魅力を体感し、何度でも訪れたいと思えるまち（*第 7 次小樽市総合計画）」を目指す。また、政府が掲げる 2030 年インバウンド 6,000 万人を見据え、国際的に“選ばれる観光都市”を目指す。

この姿を実現するため、これまでの 3 年間で築いた体制と取組を最大限活用して、本協

議会と民間・関係団体との連携を更に高めながら発展的に事業を展開していくことで、より質の高い観光地経営を進め、市民の暮らしの中に観光が根付いた高いホスピタリティの充実と、「北前船」「炭鉄港」との連携強化による幅広く奥深い観光を目指していく。

これにより、来訪者が本市の歴史や文化の魅力を全身で体感できるまちとなり、世界中から訪れる観光客が、地域の歴史的な魅力を知ることにより喜びや楽しみを感じる状態になっていることを目指す。

また、こうした取組により地域住民や事業者がその価値を再認識し、「北海道の心臓のストーリー」を「私のストーリー」として自分事と感ずることで、市民一人ひとりが、観光客をはじめとする地域外の方々に「小樽の歴史の魅力とは何か」「北海道の心臓とは何か」を伝えたいと思うようになり、さらには、受け継がれた歴史的な景観やストーリーなどの地域資源を、大切に守り伝え、そして活用していくという意識（＝郷土愛、誇り）が根付いたまちを目指す。

これらのビジョンの実現により、①地域住民が誇りを持って自ら文化資源を大切にする→②保存した文化資源が観光資源となり世界から多くの観光客が訪れる→③観光振興による経済効果が文化資源の保存と活用に充てられる→④地域住民の誇りがさらに育まれる→①に戻りさらに増幅していく、という好循環が生み出される。

ビジョン実現のための具体的な展開

■育成した人材活用と民間協業（民の力）

日本遺産を活用した観光振興を推進していくためには、協議会の取組はもとより、民間との連携体制が不可欠である。

本協議会では、2021年の候補認定後、「人材育成」に力を入れ、これまで47名の「小樽市日本遺産地域プロデューサー」と、31名の「小樽市日本遺産インタープリター」を輩出した。育成したプロデューサーは、既に着地型旅行商品の造成や、日本遺産周遊アプリの開発、日本遺産を活かした商品開発などの取組に繋げており、インタープリターは、市内の様々なツアーで活躍している。

また、候補認定後、市制100周年や運河100周年の機会を通じて、本市のまちづくり活動に積極的に関わるようになった若い世代（新たな民の力）のアイデアと実行力は、本市の日本遺産の活用非常に大きな力となっている。

これらの人材を、今後より一層活用・連携し、柔軟なアイデアと機動力を生かしながら共同で日本遺産を活かした取組を推進することで、観光振興と地域経済の活性化に繋げる。

■磨き上げた魅力の発信

これまで「北海道の心臓」をより魅力的に伝えていくことを目的に、ストーリーの磨き上げに取り組んで来た。これまでは、候補地域として、ストーリーの深化をメインに注力してきたが、これからは、これらの成果を活かして、磨き上げた魅力を地域住民はもとより国内外に広く発信していくフェーズとなる。

このため、これらの成果を国内外の観光客に広く周知していくほか、住民への普及啓発にも取り組んでいく。インバウンドについては、2023年度に観光庁の「地域観光資源の多言語解説整備支援事業」を活用して整備した英語解説文を活用して、歴史文化に関心が高い欧米豪からの観光客を中心に日本遺産の魅力を幅広く、深く、訴求する。

■更なる魅力の掘り起こし

「北海道の心臓」のストーリーは、明治期からの約 150 年のストーリーのため日本遺産の中では比較的短い歴史であるが、そのストーリーは、日本の近代化から現在に至るまでの極めてダイナミックなものである。このため、「北海道の心臓」から派生する「ひと」「もの」「こと」に関する魅力的なコンテンツが多数存在し、その魅力は「小樽のイメージ」として根付き、今も多くの観光客を惹き付けている。2022 年度には、「食」をテーマに「北海道の心臓」から派生するサブストーリーの掘り起こしを行い、多くの観光客や地域住民に好評であった。

今後も、より地域の活性化に繋げていくために、「北海道の心臓ストーリー」を幹にしながら、魅力の掘り起こしを行い、「日本遺産ストーリー」×「〇〇」のように、異なるジャンルとの掛け算を積極的に展開していくことで、歴史と観光の相乗効果を狙い、「過去のまちの歴史」を「未来のまちの魅力」へと繋げる。

（２）地域活性化計画における目標

※各目標に対し、複数の指標を設定可

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること

指標①－A：市総合博物館への入館者数（人）

年度	実績					
	2021	2022	2023			
数値	63,343	131,937	129,512			
年度	目標					
	2024	2025	2026	2027	2028	2029
数値	132,000	134,000	136,000	138,000	140,000	142,000
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法		・市総合博物館は、日本遺産ストーリーに関連する多くの展示がされているほか、建物自体が構成文化財であり、ストーリーに触れ、その魅力を体験することができる施設であるため、指標とする。 ・第 7 次小樽市総合計画により掲げる目標値（R10 年度）を参照。 ・博物館の集計結果により把握。				

目標②：地域において日本遺産のストーリーが誇りに思われること						
指標②－A：地域の文化に誇りを感じる住民の割合（％）						
年度	実績					
	2021	2022	2023			
数値	49.5	55.6	63.8			
年度	目標					
	2024	2025	2026	2027	2028	2029
数値	58	60	61	62	63	64
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法		・日本遺産制度の目的であるシビックプライドの醸成を図るため地域への文化に誇りを感じる住民の割合を指標とする。 ・DMO 形成確立計画の目標値を参照。 ・協議会によるアンケート調査を実施。				

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標③－A：宿泊客延数（人）						
年度	実績					
	2021	2022	2023			
数値	476,400	882,600	1,128,000			
年度	目標					
	2024	2025	2026	2027	2028	2029
数値	1,143,000	1,179,000	1,216,000	1,255,000	1,300,000	1,350,000
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法		・日本遺産への関心の高まりにより、地域の周遊促進や滞在時間・日数の延長につながると考えられることから、市内の宿泊客延数を指標とする。 ・第7次小樽市総合計画により掲げる目標値（R10年度）を参照。 ・小樽市観光入込調査の集計結果により把握。				

目標④：日本遺産のストーリー・構成文化財の持続的な保存・活用が行われること						
指標④－A：小樽ファンが支えるふるさとまちづくり寄付金額（円）						
年度	実績					
	2021	2022	2023			
数値	51,183,430	69,845,290	77,854,220			
年度	目標					
	2024	2025	2026	2027	2028	2029
数値	80,000,000	82,400,000	84,800,000	87,200,000	89,600,000	92,000,000
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法		・構成文化財の多くが小樽市歴史的建造物として登録・指定されているため、その保全を目的とする寄付金額を指標として設定する。 ・2024年度には80,000,000円に達し、その後は3%ずつ増。 ・市所管課の集計により把握。				

目標⑤：地域への経済効果も含め広く波及効果が生じること						
指標⑤－A：観光入込客数（人）						
年度	実績					
	2021	2022	2023			
数値	2,659,000	4,065,000	7,612,100			
年度	目標					
	2024	2025	2026	2027	2028	2029
数値	7,400,000	7,500,000	7,600,000	7,700,000	7,800,000	7,900,000
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法		・観光客は地域への経済効果をもたらすため、その数を指標とする。 ・R5 観光庁「地域一体となった観光地・観光産業の再生・高付加価値化事業」地域計画の目標値を参照。 ・小樽市観光客入込調査により把握。				
指標⑤－B：外国人宿泊客延数（人）						
年度	実績					
	2021	2022	2023			
数値	2,083	91,835	213,241			
年度	目標					
	2024	2025	2026	2027	2028	2029
数値	295,000	303,850	312,700	321,550	330,400	339,250
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法		・外国人観光客はその消費額が特に多いことから指標とする。 ・2024 年度にはコロナ禍以前の水準とし、その後は 3% ずつ増。 ・小樽市観光客入込調査により把握。				

(3) 地域活性化のための取組の概要

■育成した人材活用と民間協業（民の力）

人材育成

これまで育成してきたプロデューサーは着地型旅行商品の造成や、日本遺産周遊アプリの開発、日本遺産を活かした商品開発などのそれぞれのフィールドを活かした取組に繋げており、彼らがこれまで以上に活動を活性化できるような事業を行う。

また、ガイドへの登竜門とも言える「おたる案内人」への受験者・合格者を増やし、ガイド人口の底上げを図るとともに、市内で既に活躍するガイド向けに日本遺産についての研修を実施することでストーリーの語り部を増やし、認知度の向上につなげる。

普及啓発

日本遺産ブランドを活用し、市民の特に若い世代をターゲットにした普及啓発を行っていく。候補認定後、市制 100 周年や運河 100 周年の機会を通じて、本市のまちづくり活動に積極的に関わるようになった若い世代（新たな民の力）のアイデアと実行力を活かし、日本遺産を通じたにぎわいや学習の機会を通じて、自身が住んでいる地域への興味・関心・好奇心が刺激され、地域活動への参加・シビックプライドの醸成につなげる。

■磨き上げた魅力の発信

整備

令和 5 年観光庁の「地域観光資源の多言語解説整備事業」に地域採択を受け、候補地域ストーリー及び構成文化財の解説文を作成した。これらを活用し、インバウンドを対象とした日本遺産ストーリーを軸に周遊が可能な環境整備を行っていく。また、小樽にはＪＲやバス、レンタカーなど様々な交通機関を使って多くの観光客が訪れている。近年小樽港にはクルーズ客船が多く寄港しており、アジア圏はもとより欧米豪各国の観光客も多いことから、ＪＲ小樽駅、小樽運河からほど近い第 3 号ふ頭及びその周辺の再開発により国際旅客船ふ頭をはじめ海陸観光交通の拠点機能を持った水辺を活かし、海や船を身近に感じる市民・観光客のにぎわいを創出できる空間として整備が行われることから、その拠点機能を最大限に生かし、周遊促進につなげる環境整備を行う。

情報編集、発信

日本遺産のストーリーをコンセプトとするホームページをプラットフォームに据え、日本遺産の紹介のほか、周遊マップ、散策コースパンフレット、まち歩き等周遊コンテンツの多言語化を含めて発信を進める。あわせて、日本遺産「北前船寄港地・船主集落」、「炭鉄港」を含めた動画コンテンツをホームページで発信するほか、SNS (Facebook、Instagram、X (旧 Twitter)) を活用したプッシュ型情報発信を積極的に行い、情報発信のチャネルの拡大とともに、人流データを活用したサンプルに基づく来訪者調査を実施し、デジタルマーケティングによる即応性を高める。

■更なる魅力の掘り起こし

観光事業化

小樽観光の課題として、小樽運河の南側及び堺町近辺に観光客が偏在化することによる通過型観光になっていることが挙げられる。そこで日本遺産を活用した周遊促進を行うことで、通過型観光から滞在型観光へとシフトしていく。具体的には、これまで磨き上げてきたストーリーやサブストーリーを活用したモデルルートの作成や、ストーリーを体験でき

る観光商品の造成を行うことが挙げられる。また、2024年に100周年を迎える旧北海製罐倉庫(株)第三倉庫の活用や2025年に大規模保存修理工事を終える旧日本郵船(株)小樽支店の公開を契機に小樽運河の原風景が残る北運河地区への周遊を促すことで日本遺産ストーリーの根幹とも言える小樽運河のポテンシャルを最大限発揮できる事業を実施する。

(4) 実施体制

実施体制

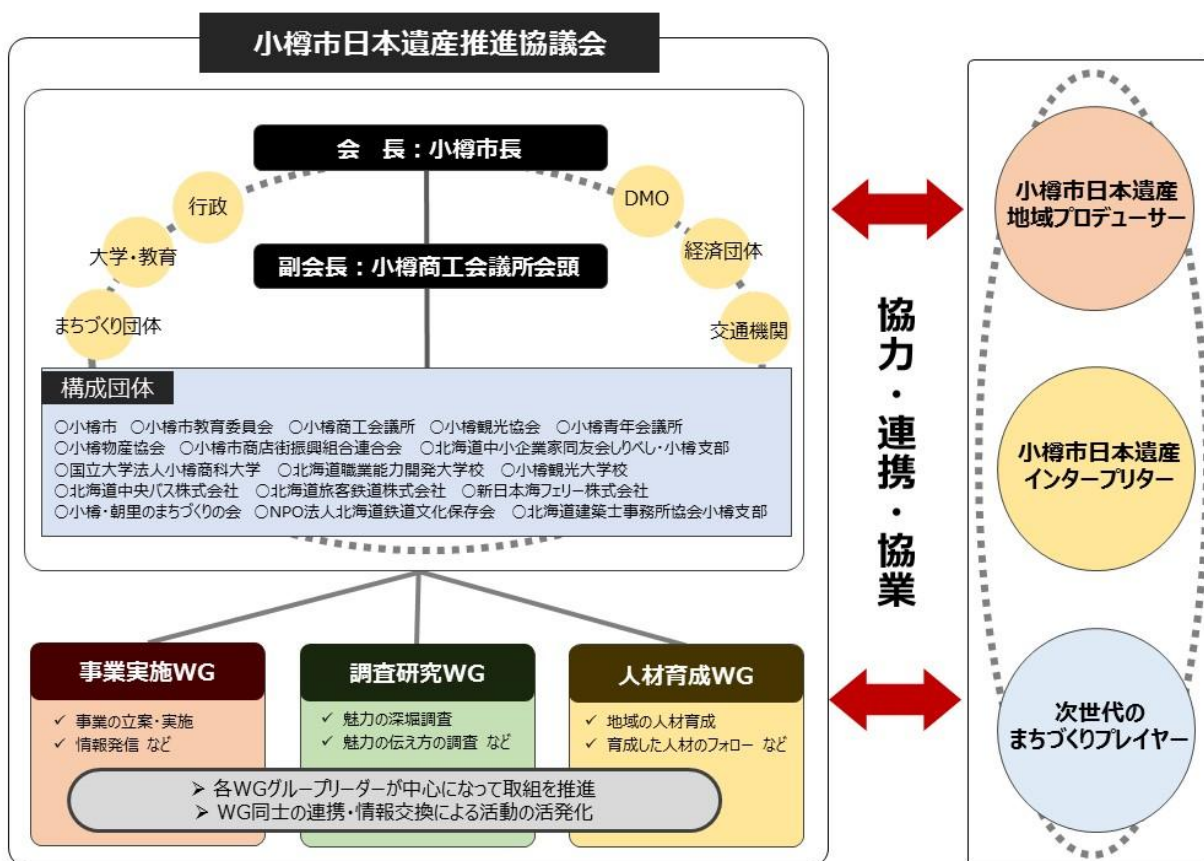
本協議会は、小樽市長を会長に、産学官その他あらゆる分野の関係者が垣根を越えて参画するオール小樽の体制を構築しており、構成員それぞれが有する知見や優位性を活かし、相乗効果を生む活動の特徴としている。

取組の推進にあたっては、「人材育成」「普及啓発」「調査研究」3つのワーキンググループ（以下、「WG」という）を軸に、各WGリーダーが中心となって多様な関係者の意見を取りまとめるとともに、WG間の横の情報共有を積極的に行う横断的な実施体制としている。

また、本協議会の構成員である(一社)小樽観光協会は、2022年10月に登録DMOとなり、マーケティングや戦略立案など、同協会が有する知見・能力を協議会の運営に最大限反映していく。

さらに、2021年の候補地域認定後、本協議会が力を入れて取り組んで来た「人材育成」の成果を活かして、「小樽市日本遺産地域プロデューサー※1」や「小樽市日本遺産インタープリター※2」と緊密に連携して取組を進めることで、「現代の民の力」との協業による地域一体となった連携体制とする。

なお、市の内部においては、本協議会の事務局を小樽市産業港湾部観光振興室に置き、「歴史を活かした庁内検討会議」を通じて、建設部新幹線・まちづくり推進室と教育部生涯学習課と横断的に庁内連携する体制を築いている。



- ※1 小樽市日本遺産地域プロデューサー～日本遺産を地域の魅力づくりにつなげる人材
 ※2 小樽市日本遺産インタープリター～日本遺産の魅力と感動を伝える技術を持つガイド

〔人材育成・確保の方針〕

- ・これまで育成した「小樽市日本遺産地域プロデューサー」や「小樽市日本遺産インタープリター」と本協議会との連携をより一層強めるとともに、スキルアップや活動活性化を目的としたフォローアップの機会を創出し、日本遺産を通じた地域活性化の取組の推進体制を確保する。
- ・おたる案内人検定制度（小樽観光大学校）によりガイド育成を継続し、小樽の魅力を伝えることができる人材の確保を行う。
- ・ガイドをはじめ観光業に携わる人材に、研修を行い、おもてなしや魅力を伝える技術のスキルアップを図る。
- ・市制 100 年イベントや運河 100 年イベントなどを通じて本市のまちづくり活動に積極的に関わるようになった若い世代と連携した取組を継続して実施していくことで、「新たな民の力」による地域活性化の体制を確保する。

（５）日本遺産の取組を行う組織の自立・自走

- 自走に向けた経済的な仕組み
 - ・小樽の観光振興税（宿泊税）の導入、歴史的建造物の保存・維持・管理を目的とした「ふるさと納税」からの寄附金、本協議会事業や構成文化財の保全費用、観光振興施策に充当する仕組みを構築する。
 - ・民間事業者と連携した商品開発・販売を行いその売上の一部を協議会の事業に充当できる仕組みづくりを行う。
- 民間との連携・機能分担

観光協会（DMO）、民間事業者との連携を強化し、モデルコースや新たなコンテンツ、にぎわいの創出を行い、民間事業者が主体的に日本遺産を活用できるように取り組む。

 - DMO（観光協会）：マーケティング、着地型ツアー販売等で連携
 - 地域プロデューサー、民間事業者：旅行商品、体験コンテンツの企画・販売、ストーリーを活用した商品造成
 - 観光大学校：次世代の人材育成
 - 国際観光客誘致実行委員会：海外プロモーション
- 継続的な取り組みに向けた関連計画への位置づけ

地域経済や住民生活への貢献を各行政計画に記載することにより、日本遺産との関係性を明確化し、継続的な実行を行う。

 - ・第 7 次小樽市総合計画（2019～2029 年度）

今後の観光振興において、点在する資源を面として活用する広域連携は不可欠であると考えられ、豊かな自然や食など、魅力あふれる観光資源を持つ後志圏域や日本遺産認定のストーリーと連携した広域なルートづくりを目指すとしている
 - ・小樽市第 2 次観光基本計画（2017～2026 年度）

広域的な観光圏の形成を目指すために日本遺産認定のストーリーと連携した観光ルートの創出は観光の広域化の推進力になり得るとしている。
 - ・第 2 期小樽市総合戦略（2020～2024 年度）

日本遺産認定と連動したまちなみの保全や、歴史的建造物・空き家・空き店舗など建築ストックの有効活用を促し、観光振興や移住・定住の促進に努めるとともに、観光・商業・物流の拠点として小樽駅周辺や小樽港などの魅力向上を図り、活気ある地域を目指すとしている。

・小樽市人口ビジョン（令和2年改訂版）

美しいまちなみと自然を活かした交流の場づくりを目指しており、特徴ある景観を形成する重要な資源となっている産業・文化遺産などの保全・活用を推進するとともに、歴史や日本遺産認定のストーリーと連携したツーリズムなど、観光振興を推進していくとしている

・第2次小樽市都市計画マスタープラン（2020年度～2039年度）

地域資源を生かしたまちの魅力の向上を目指し、日本遺産に指定された文化財や歴史的建造物などの地域資源を生かし、潤いやにぎわいの感じられる魅力ある地域を目指すとしている

・小樽市歴史文化基本構想（平成31年策定）

市民と長期的に文化資源を保存・活用するためのマスタープランとして平成31年3月に小樽市歴史文化基本構想を策定している。同構想を周知するため、令和2年度に「小樽の文化財」冊子を発行し、日本遺産「北前船」「炭鉄港」に加えて、今般申請したストーリーの要素も含めている。

・小樽市歴史的風致維持向上計画（策定中）

（6）構成文化財の保存と活用の好循環の創出に向けた取組

小樽ファンが支えるふるさとまちづくり寄付金の活用による保全整備

歴史的な財産を後世に引き継ぎ、個性豊かな魅力あるまちづくりを実現するための具体的な次の事業を示し、賛同していただける全国の「小樽ファン」の皆さまから基金への寄付を募り、まちづくりを進めており、「小樽ファンが支えるふるさとまちづくり寄附条例」を制定している。

- ・旧国鉄手宮線の保全および活用事業
- ・市立小樽文学館および市立小樽美術館の整備事業ならびにその周辺の整備事業
- ・小樽市総合博物館の展示鉄道車両の保全事業
- ・小樽市公会堂の能楽堂の保全および整備事業
- ・小樽の歴史と自然を生かしたまちづくり景観条例に基づく登録歴史的建造物の保全事業
- ・その他市長が必要と認める事業

文化財の調査研究

特色ある文化財からサブストーリーを抽出するための調査研究を行う。ストーリーにまつわる多様な文化について、関係機関と協力して調査・研究を進めながら、保存・活用を図り、ストーリーを磨き上げていく。

景観保全

歴史的建造物保全助成金により、市景観条例で指定する指定歴史的建造物のうち、民間が所有する歴史的建造物の外観の保全に要する経費の一部を助成しながら小樽らしい町並みを保全し、その町並みに魅せられた若い力により、構成文化財の新たな活用に繋げていく。

観光拠点との一体的運営

小樽の観光拠点は、小樽運河や堺町地区に偏在化する傾向にあることから、各構成文化財を周遊させ、ストーリーを体験したくなるような環境づくりをしていくこと。

デジタルでの保存と活用

ストーリーの根幹となる小樽運河を語るうえで重要な運河保存運動の資料は、通常公開されていないため、訪れた観光客がストーリーに触れるための一つのハードルとなっている。そこで、観光客が気軽に操作できるタッチディスプレイデジタルサイネージを導入し、デジタルによる運河保存運動の資料閲覧からストーリーに引き込むことができるよう活用していく。

歴史まちづくり法に基づく歴史的風致維持向上計画の策定

日本遺産ストーリーとの関わりの深い未指定の歴史的建造物やその周辺の市街地環境が整理され、支援を必要とする歴史文化資源を明確化し、国の支援制度（補助金等の）の活用により、歴史的な環境の維持・向上を図っていく。

(7) 地域活性化のために行う事業

(7) - 1 組織整備

(事業番号 1 - A)

事業名	事業運営体制の整備・民間連携		
概要	計画の円滑な実施に向け、関係者間の連携と民間連携を強化しながら、事業を推進する体制を構築する。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	協議会の運営	協議会に民間主体の「事業実施」「人材育成」「調査研究」をテーマにしたワーキンググループを設置し、各ワーキンググループにて、事業の方向性や手法、効果について検討を行い事業実施していく	協議会
②	育成した人材との連携	これまで認定した小樽市日本遺産地域プロデューサーや小樽市日本遺産インタープリターと緊密に連携して取組を実施し、地域一体となった連携体制を構築する	協議会、事業者
③	庁内関係部局との連携	日本遺産に係る地域活性化、文化財、歴史的建造物の保全で「歴史を活かしたまちづくり庁内検討会議」を継続して実施。各事業実施状況について報告し、それぞれが連携し、より効果的な事業となるよう協議・検討を継続する。	小樽市
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2021	個人サポーター数		42 人
2022			53 人
2023			78 人
2024	法人・個人サポーターと連携した事業		3 件
2025	同上		5 件
2026	同上		6 件
2027	同上		7 件
2028	同上		8 件
2029	同上		9 件
事業費	2024 年度：200 千円 2025 年度：200 千円 2026 年度：200 千円		
継続に向けた事業設計	密に連携を取り、各個人サポーターの知見やスキルを活かした事業を実施していくことで日本遺産のブランディングを行っていく。		
事業費	2027 年度：200 千円 2028 年度：200 千円 2029 年度：200 千円		
継続に向けた事業設計	同上		

(7) - 2 戦略立案

(事業番号 2 - A)

事業名	歴史的風致の維持向上に向けた取組みと戦略的マーケティング		
概要	歴史まちづくり法に基づく計画策定を行うとともに、DMOによりマーケティングを行い、戦略立案に活かす。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	小樽市歴史的風致維持向上計画の策定	日本遺産ストーリーとの関わりの深い本市固有の歴史文化資源を守り育て、後世に継承するとともに、歴史的な環境を活かしたまちづくりを進めるため、歴史まちづくり法に基づく計画を策定する。	小樽市
②	DMOによるマーケティングの実施とターゲットの選定	DMOである小樽観光協会が行うマーケティング、ターゲットを協議会の活動に活かすことで、事業効果を最大化していく	観光協会、協議会
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2021	日本遺産との関係性を明確化した計画本数		6 本
2022			6 本
2023			6 本
2024	同上		6 本
2025	同上		7 本
2026	同上		7 本
2027	同上		7 本
2028	同上		7 本
2029	同上		7 本
事業費	2024 年度：6,200 千円 2025 年度：500 千円 2026 年度：500 千円		
継続に向けた事業設計	地域経済や住民生活への貢献を各行政計画に記載することにより、日本遺産との関係性を明確化し、継続的な実行を行う		
事業費	2027 年度：500 千円 2028 年度：500 千円 2029 年度：500 千円		
継続に向けた事業設計	同上		

(7) - 3 人材育成			
(事業番号 3-A)			
事業名	日本遺産を活用する人材・事業者の育成とホスピタリティの向上		
概要	地域プロデューサーはもとより、ガイドを含む観光従事者を日本遺産ストーリーの語り部として育成し、ホスピタリティの向上を図るための事業を実施		
	取組名	取組内容	実施主体
①	地域プロデューサーの活動の活性化	育成した小樽市日本遺産地域プロデューサーの活動をより活性化できるよう、交流会、勉強会を実施するほか、SNS グループを活用した情報交換を実施。	協議会
②	おたる案内人検定の実施	観光ガイド検定試験の枠を超え、「ひとづくり」はもとより、「まちづくり」や「地域を誇る文化の醸成」を組み込んだプログラムにより、小樽の歴史や文化などに対する幅広い知識を有した地域に誇りを抱く市民や産業人の育成を目指した「おたる案内人検定」を実施。	観光大学校
③	観光従事者向け日本遺産研修の実施	日本遺産のストーリーをわかりやすくまとめた解説集を活用し、市内ガイドを含む観光従事者を対象に、日本遺産に関する研修を行い、スキルアップに繋げる	協議会、民間事業者
④	おもてなしセミナーの開催	観光事業者や宿泊事業者等向けにおもてなしの実践的な研修を実施する。	観光協会、民間事業者
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2021	おたる案内人の合格者数		1,281 人
2022			1,339 人
2023			1,421 人
2024	同上		1,500 人
2025	同上		1,580 人
2026	同上		1,660 人
2027	同上		1,740 人
2028	同上		1,820 人
2029	同上		1,900 人
事業費	2024 年度：5,600 千円 2025 年度：6,600 千円 2026 年度：6,600 千円		
継続に向けた事業設計	地域プロデューサーの活動がそれぞれの分野で、主体的に事業を実施する人材が増える取組を行う。		
事業費	2027 年度：6,600 千円 2028 年度：6,600 千円 2029 年度：6,600 千円		
継続に向けた事業設計	同上		

(7) - 4 整備			
(事業番号 4 - A)			
事業名	日本遺産ストーリーを体験するための環境整備		
概要	ストーリー体験までのカスタマージャーニーを意識した環境整備とインバウンド対応を実施。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	タッチパネルサイネージの設置	「北海道の心臓」のストーリーの動画閲覧や、マップ、構成文化財の説明やインバウンド対応が可能なタッチパネルサイネージを設置する。	協議会
②	ストーリー、構成文化財について解説する案内板、QRコードの作成	ストーリーを体験するための説明版を設置するとともに、それぞれの構成文化財にストーリーを伝える QR コードを設置。	協議会
③	アクセス、周遊環境の整備	小樽は坂道が多いため電動自転車を活用し、構成文化財を周遊できる仕組みづくりを実施する	協議会、民間事業者
④	インバウンドに向けたストーリーを伝える整備	外国語パンフレットを作成し、訪日外国人観光客にもストーリーをわかりやすく整備する。HPの多言語対応。	協議会、民間事業者
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2021	外国人宿泊客延数		2,083 人
2022			91,835 人
2023			213,241 人
2024	同上		295,000 人
2025	同上		303,850 人
2026	同上		312,700 人
2027	同上		321,550 人
2028	同上		330,400 人
2029	同上		339,250 人
事業費	2024 年度 : 2,600 千円 2025 年度 : 1,000 千円 2026 年度 : 2,000 千円		
継続に向けた事業設計	小樽国際観光客誘致実行委員会と連携し、インバウンド向けにプロモーションを行い、圏域の魅力をアピールしていく。		
事業費	2027 年度 : 2,000 千円 2028 年度 : 2,000 千円 2029 年度 : 2,000 千円		
継続に向けた事業設計	同上		

(7) - 5 観光事業化			
(事業番号 5 - A)			
事業名	ストーリーを活用した周遊促進		
概要	小樽運河の原風景が残る北運河側をはじめ日本遺産を活用した周遊促進を行う。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	構成文化財の新たな観光拠点への活用	小樽運河と歴史を共にする構成文化財「旧北海製罐倉庫(株)第三倉庫」を、北運河観光の目玉として活用する	協議会、民間事業者
②	モデルルートの作成	地域プロデューサーやインタプリターを活用し、北運河地区を中心に構成文化財を周遊し、ストーリーを体感することができるモデルルートを作成する。	協議会、民間事業者
③	ストーリー体験を組み込んだ着地型観光商品の開発	地域プロデューサーやインタプリターを活用し北運河地区をはじめストーリーを体感することができる観光商品を造成し販売を行う。	協議会、民間事業者
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2021	小樽再来訪の意思 (アンケート調査)		91.0%
2022			93.2%
2023			91.5%
2024	同上		94.0%
2025	同上		94.5%
2026	同上		95.0%
2027	同上		95.0%
2028	同上		95.0%
2029	同上		95.0%
事業費	2024 年度 : 2,000 千円 2025 年度 : 2,000 千円 2026 年度 : 1,000 千円		
継続に向けた事業設計	第 3 号ふ頭の整備や、旧北海製罐倉庫(株)第三倉庫の活用により、北運河地区への誘客が増えることで、対象地区への新規事業者の参入につなげる。		
事業費	2027 年度 : 1,000 千円 2028 年度 : 1,000 千円 2029 年度 : 1,000 千円		
継続に向けた事業設計	同上		

(事業番号 5-B)

事業名	ストーリー、構成文化財を活用した商品の販売		
概要	ストーリー、構成文化財を活用した商品を販売することで、その一部を協議会の活動に充てる仕組みを構築する。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	ストーリー、構成文化財を活用した商品の販売	ストーリー、構成文化財を活用した商品を販売することで、その一部を協議会の活動に充てる仕組みを構築する。	協議会、民間事業者
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2021	商品の販売個数		0 個
2022			0 個
2023			3,570 個
2024	同上		7,000 個
2025	同上		10,000 個
2026	同上		12,000 個
2027	同上		14,000 個
2028	同上		16,000 個
2029	同上		18,000 個
事業費	2024 年度 : 500 千円 2025 年度 : 500 千円 2026 年度 : 500 千円		
継続に向けた事業設計	商品開発においては、事業者、販売店、協議会の 3 者においてベネフィットが生じるようなスキームを構築していく。		
事業費	2027 年度 : 500 千円 2028 年度 : 500 千円 2029 年度 : 500 千円		
継続に向けた事業設計	同上		

(7) - 6 普及啓発			
(事業番号 6 - A)			
事業名	次世代へつなぐストーリー伝承、後世へつなぐ構成文化財の活用事業		
概要	次世代を担う若年層に向けたストーリーを楽しみながら伝える機会を創出し、シビックプライドの醸成に繋がる普及啓発事業の実施。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	歴史的建造物めぐり	構成文化財の多くが指定されている歴史的建造物を市民とめぐり、専門家の解説とともにその価値や保全の必要性について考えるツアーの実施	小樽市
②	おたる案内人ジュニアの育成	小学5・6年生を対象としたおたる案内人ジュニアを育成し、実際に観光客に対しガイド実践を行う。	観光大学校
③	構成文化財を活用した普及イベントの開催	北海製罐倉庫(株)第3倉庫や旧日本郵船(株)小樽支店などの構成文化財が多く残る北運河地区をはじめ、構成文化財を活用し、魅力を伝える機会を創出する。	協議会、小樽市、民間事業者
④	日本遺産フェスティバルをはじめとした各イベントにおけるPR	各種イベントにおいて、プロモーションを行い、「北前船」「炭鉄港」とともに日本遺産について一体的に情報発信を行う。	協議会、小樽市、民間事業者
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2021	地域の文化に誇りを感じる住民の割合		49.5%
2022			55.6%
2023			63.8%
2024	同上		58.0%
2025	同上		60.0%
2026	同上		61.0%
2027	同上		62.0%
2028	同上		63.0%
2029	同上		64.0%
事業費	2024 年度：5,620 千円 2025 年度：5,620 千円 2026 年度：5,620 千円		
継続に向けた事業設計	関係団体と連携して、楽しみながらストーリーを学ぶことができる機会を創出し、参加意欲の向上につなげることで、事業の継続性を高める。		
事業費	2027 年度：5,620 千円 2028 年度：5,620 千円 2029 年度：5,620 千円		
継続に向けた事業設計	同上		

(7) - 7 情報編集・発信			
(事業番号 7-A)			
事業名	情報発信事業		
概要	小樽市が認定されている日本遺産「北前船」、「炭鉄港」の魅力とともに各種コンテンツやイベント情報をポータルサイト及び SNS を活用し情報発信を行う。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	WEB サイトの継続的な更新	協議会で設置している WEB サイト（小樽文化遺産ポータル）に各種解説や日本遺産の取組み、関連イベントの告知などの最新情報を更新していく。	協議会
②	SNS による情報発信	SNS プラットフォームはユーザーの興味や属性にターゲットを絞り込むことができるため、狙った層に育成したプロデューサーが主体的に情報発信をし、上記 WEB サイトへの引き込みを行う	協議会、日本遺産地域プロデューサー
③	小樽市や民間事業者との連携による情報発信	各種関連イベント・事業等の開催については、自治体や観光協会等の広報や HP、SNS 等により広く、地域住民・観光客に情報発信を行う。	協議会、小樽市、民間事業者
④	各種メディアへの露出	情報誌やマスメディア等への情報露出を積極的に行い、ユーザーが受動的に情報に触れることができる機会を増やす。	協議会、小樽市、民間事業者
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2021	小樽文化遺産ポータルの PV 数		224,480pv
2022			564,883pv
2023			1,021,282pv
2024	同上		1,200,000pv
2025	同上		1,500,000pv
2026	同上		1,900,000pv
2027	同上		2,200,000pv
2028	同上		2,500,000pv
2029	同上		2,800,000pv
事業費	2024 年度：200 千円 2025 年度：100 千円 2026 年度：100 千円		
継続に向けた事業設計	WEB サイトや SNS、各情報メディアの特性を活かし、それぞれに適した情報発信の方法を行っていく。		
事業費	2027 年度：100 千円 2028 年度：100 千円 2029 年度：100 千円		
継続に向けた事業設計	同上		